



国際協力を身近に感じてもらえるよう、工夫を凝らしたJICAブース。2日とも多くの人でにぎわっていた



メインステージで行われたトークセッションでネパール視察を報告する道端ジェシカさん(中央)と、フリーキャスターの伊藤聡子さん、JICA南アジア部の市口知英課長

「グローバルフェスタJAPAN2011」開催

01

10月1日・2日に、外務省、JICA、NPO法人国際協力NGOセンター(JANIC)の共催で「グローバルフェスタJAPAN2011」が東京・日比谷公園で開催され、2日間で約11万人が来場しました。

今年は、「絆」私たちはつながっている世界は日本とともに。日本は世界とともに。」がテーマ。東日本大震災の被害を受けた日本に対し、開発途上国を含めた世界各国の子どもたちが、絆をテーマにした絵や日本への応援メッセージが展示されました。

JICAはブースを出展し、途上国で行っている支援について紹介するパネルを展示したほか、国際協力に関するクイズや相談コーナーなどを通して、ODAへの理解を訴えました。また、JICA、国連開発計画(UNDP)、JANICが昨年7月に立ち上げた「なんとかしなきゃ!プロジェクト」のブースのほか、JICAの教育プロジェクトなどが紹介された「外務省/JICA座談会ブース」もあり、国際

協力に関心が高い学生など多くの人々にぎわいました。

さらにメインステージでのイベントとして、1日には「なんとかしなきゃ!プロジェクト」の著名人メンバーでモデルの道端ジェシカさんが登場し、9月に訪れたネパール視察について報告。学校を保健活動の場として利用し住民の健康改善を目指すプロジェクトや、果樹園の生産性向上を支援する青年海外協力隊の活動現場を訪れた道端さんは、「途上国で生き生きと活躍している自分と同世代の協力隊員たちの情熱に驚きました」と話しました。

2日のメインステージでは、NPO法人「地球のステージ」代表理事の桑山紀彦さんによる歌と語り「地球のステージ」東日本大震災と国際協力「版」を開催。東日本大震災で自身も宮城県名取市で被災した桑山さんは、「震災発生から半年が経ちましたが、これからも被災地に関心を持ち続けてほしい」と客席に訴えていました。

医療機器メーカーのテルモと初の官民連携研修

02



模型を使い、手首の血管からカテーテルを挿入するメキシコ人医師

カテーテル治療に不可欠なアクセスデバイスと呼ばれる医療機器において、世界で高いシェアを持つテルモ株式会社。この9月、JICAは同社と協働し初の官民連携研修を実施。循環器医療に力を入れるメキシコの病院から5人の若手医師が来日しました。

近年、メキシコでは「虚血性心疾患」※による死亡者数が増加し、死因の第2位となっています。この疾患の主な治療法はカテーテルという医療用の管を使って血流を改善させる「カテーテル治療」。しかし同国では、長い手術時間を要する太ももの血管からカテーテルを挿入する方法が一般的で、患者には身体的・金銭的に大きな負担がかかっています。一方日本では、手首の血管から挿入する「TR法」が主流。合併症の危険性も低く、入院期間が短いため金銭的負担が小さいという利点があります。

そこでJICAは、アクセスデバイスの製造に強いテルモとともに「TR法」をメキシコに伝えることに。治療現場の視察やシミュレーターによる訓練などが行われました。研修員のサンドバルさんは、「TR法の効率性や安全性を実感できた」と話しています。

※心臓に血液を送る血管が何らかの原因で詰まり、心臓のポンプ機能が維持できなくなる疾患。

「JICA理事長表彰」に24人・4団体・5事業が選ばれる

03

今回で7回目となるJICA理事長表彰の表彰式が10月4日に開催され、個人部門で3人、事業部門で5事業が「JICA理事長賞」を受賞しました。

個人部門で受賞となったのは、東京工業大学大学院の原科幸彦教授、青年海外協力隊OBの遠藤弓人さん、シリア海外ボランティアの楠川富子さん。原科教授は、環境計画や環境政策の策定方法論に関する日本の第一人者で、JICAの「環境社会配慮ガイドライン」の策定に大きく貢献。看護師の遠藤さんはセネガルでマリアリア予防に取り組み、活動先の村で死者数・罹患者数ともに激減させています。カンボジアに派遣中の楠川さんは、看護管理体制づくりを推進。その功績が認められ、昨年シハモ二国王とフンセン首相から表彰を受けました。

一方、事業部門では、特定非営利活動法人ソムニードが実施した草の根技術協力プロジェクト「地域住民主導による小規模流域管理(マイクロウォーターシエッド・マネージメント)」と森林再生を通じた共有資源管理とコミュニティ開発などが受賞しています。

また「JICA国際協力感謝賞」については、国際緊急援助隊や研修事業などを通じて国内外の災害や防災対策へ長年支援を行ってきた兵庫県国際交流協会の齋藤富雄理事長をはじめ、21人・4団体が受賞しました。

授賞式で緒方貞子理事長は、東日本大震災で途上国を含む多くの国・地域から支援を受けたことに触れ、「国際協力の存在意義を再確認した方も多かったのではないかと。協力の最前線での献身的なご協力とご尽力には、心から感謝と敬意の念を表したい」と話しました。